築館町　　下萩沢遺跡（しもはぎさわ）

原田遺跡（はらだ）

現地説明会資料

下萩沢遺跡　建物６～８（東より）

２００４年１０月１６日（土）午後１時３０分より

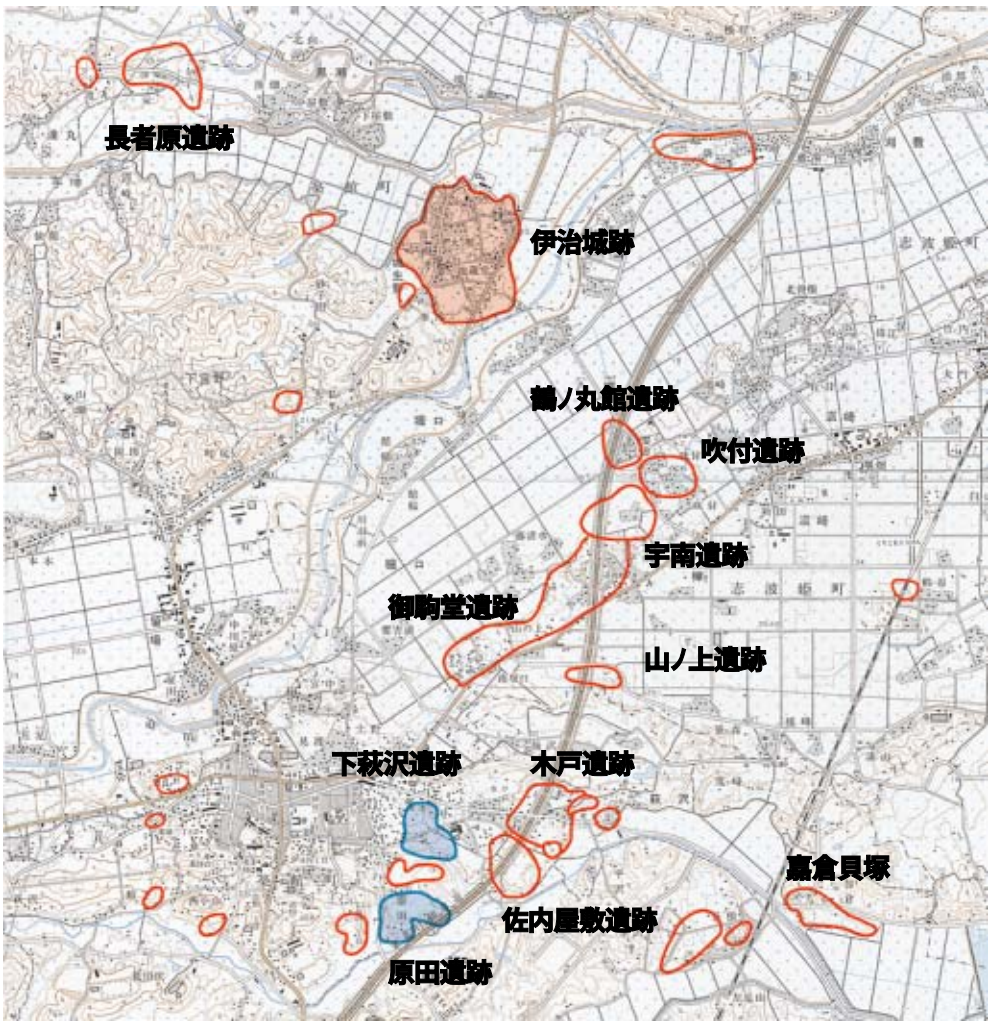
宮城県教育委員会

# 調 査 要 項

1．遺跡名　　下萩沢遺跡、原田遺跡
2．所在地　　宮城県栗原郡築館町字萩沢佐内屋敷ほか、字源光ほか
3．調査原因　国道４号築館バイパス建設工事
4．調査面積　下萩沢遺跡：約 13,000 ㎡　原田遺跡：約 11,600 ㎡
5．調査期間　平成 16 年 4 月 12 日～11 月末（予定）
6．調査主体　宮城県教育委員会
7．調査担当　宮城県教育庁文化財保護課
8．調査協力　築館町教育委員会

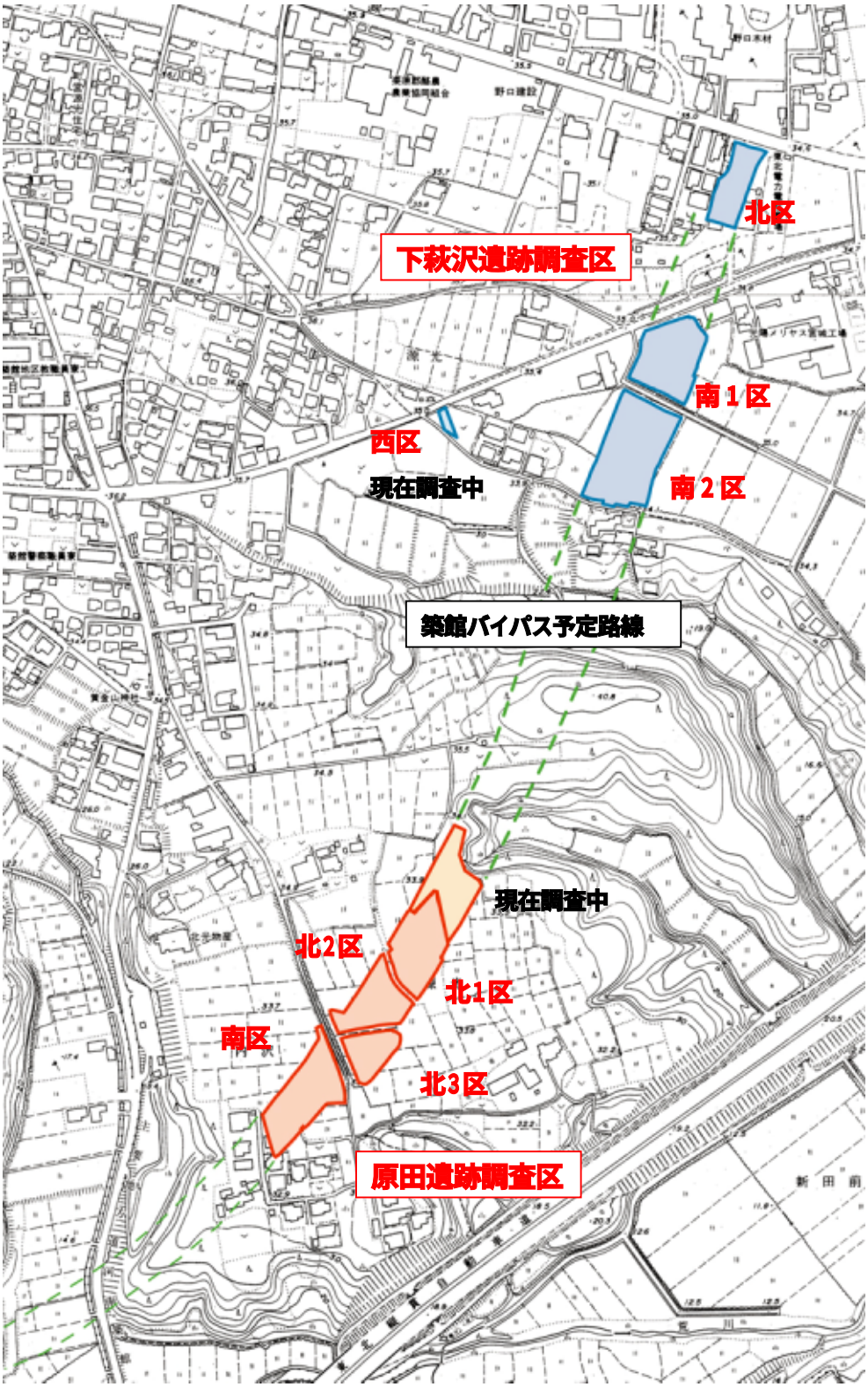
## 1．はじめに

下萩沢遺跡・原田遺跡は、町役場から約 1 ㎞東の栗原郡築館町字萩沢佐内屋敷・字源光ほかに所在しています（第１図）。遺跡は奥羽山脈から伊豆沼に向かって東に延びる丘陵上に立地しており、標高 33～34m程の平坦な地形となっています。




**第1図　遺跡の位置と周辺の古代の遺跡**

遺跡の北方約４kmの地点には、国史跡伊治城跡があります。伊治城は奈良時代に律令政府が陸奥国の栗原地方における支配の拡大をめざして設置した城柵の１つです。『続日本紀』によれば、神護景雲元（７６７）年に造営され、１３年後の宝亀１１（７８０）年には伊治公呰麻呂の乱で政庁の建物などが焼かれたことなどが知られています。また、日本で初めて弓の一種である「弩」の一部の「機」が発見されました。




**第2図　調査区の位置**

今回、下萩沢・原田遺跡内に国道４号線築館バイパスの建設予定地がかかったため、宮城県教育委員会、築館町教育委員会、国土交通省で協議を行いました。しかし、遺跡の保存は難しく、遺跡の一部がやむをえず壊されてしまうことになったため、建設工事に先立って、発掘調査を行うことになりました（第２図）。

## ２．下萩沢遺跡で発見した主な遺構

今回の調査では、掘立柱建物跡 21 棟、竪穴住居跡 13 軒、竪穴遺構 1 基、土壙（どこう）、溝跡などが見つかっています（第３図）。これらの多くは８世紀後半頃（奈良時代の後半頃、今から 1200～1250 年前）のものと思われます。

**【掘立柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）】**

掘立柱建物跡とは、地面に方形もしくは隅丸方形の穴を掘って柱を立てて屋根をのせる建物のことです。21 棟見つかり、ほとんどが奈良時代のものと思われます。

建物1・2（南より）

建物3・4（南より）

建物１・２は桁行（けたゆき）３間（長さ 5.8～6.0m）、梁行（はりゆき）２間（幅約 4.2m）の南北に長い建物で、方向を揃えていることから同時期のものと思われます。建物３・４は住居２に壊されていますが、建物１・２とほぼ同様な規模の建物と思われ、南北に並んでいることから同時期のものと思われます。柱の太さは約 20 ㎝と推定されます。

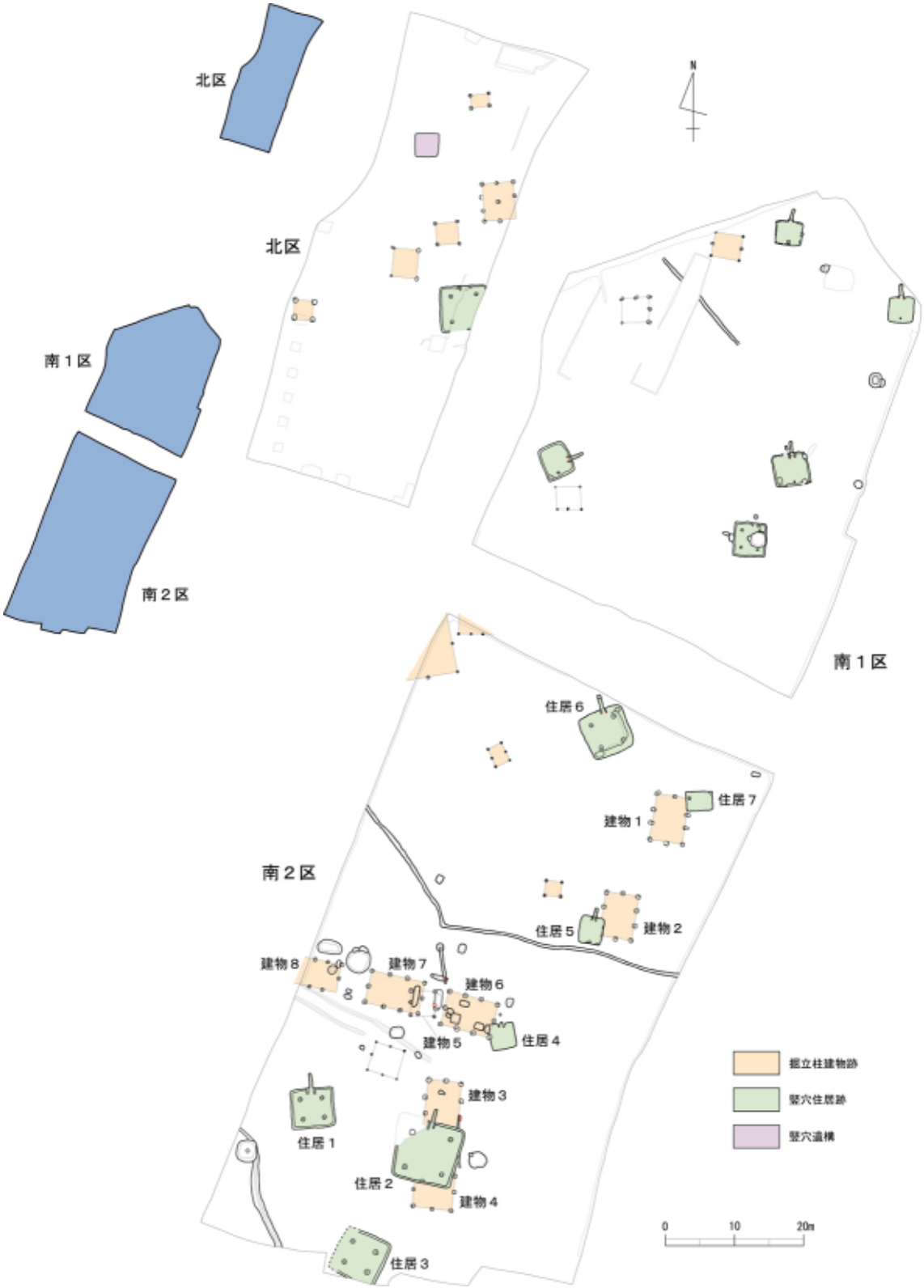
建物６・７は桁行３間（長さ 6.6～7.1m）、梁行２間（幅 4.2～4.3m）の東西に長い建物で、柱の太さは約 20 ㎝と推定されます。建物６・７と、規模は不明ですが建物８は、東西に並んでおり、同時期のものと考えられます。

これらの建物の方向は、やや東に振れるものもありますが、ほぼ真北を基準として建てられています。

**【竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）】**

竪穴住居跡とは地面を方形に掘りくぼめて床と壁をつくり、その中に柱を立てて屋根をのせた家です。13 軒見つかりました。

住居の平面形はほぼ方形で、規模は一辺３mのものから８mのものまで様々な大きさの住居が見られます。炊事のための施設であるカマドは北側もしくは東側の壁際に備え付けられています。




**第3図　下萩沢遺跡の遺構配置図**

**第4図　原田遺跡の遺構配置図**

住居１は、一辺 6.5mの方形のものです。カマドは北壁の中央に付けられ、粘土質の土でつくられており、土器で補強されています。この住居は多くの炭化した木材がみつかっていることから焼失したものと考えられます。また、炭化した木材とともに焼土のかたまりが広範囲にみられ、屋根の上にのせた土が焼け落ちたものと思われます。

住居２は、一辺 8.2mの方形のもので、今回の調査では一番規模の大きい住居で、床面積は約 67 ㎡です。カマドは北壁の中央に付けられ、粘土質の土でつくられており、土器で補強されています。この住居の床には、径 20 ㎝程の焼けた部分が数ヶ所見られることから、火を使うような何らかの作業が行われていた可能性があります。また、住居２は建物６の南約 12mに位置し、建物６の東妻と住居１の東壁の方向がほぼそろっています。

## ３．原田遺跡で発見した主な遺構

今回の調査では、竪穴住居跡 6 軒、掘立柱建物跡 17 棟、竪穴遺構6 基、井戸跡 1 基、陥し穴15 基、土壙、溝跡などが見つかっています（第４図）。全体的にみると遺構はまばらに分布しています。これらの多くは８世紀後半頃から９世紀初め頃（奈良時代後半頃～平安時代初め頃、今から 1200 年程前）のものと思われますが、時期のわからないものもあります。

**【竪穴住居跡】**

全部で 6 軒見つかりました。このうち住居①は一辺 7.2mの方形のもので、火災にあっ

住居①の全景（西より）

竪穴住居模式図

竪穴住居内の様子

『古代の村』より

北壁付近の炭化した木材

床の上で出土した土器

床の上で出土した挂甲小札

て焼失したものです。床の上には多数の炭化した木材や屋根の上にのせた土が焼け落ちたものと思われる焼土のかたまりが残っていました。また当時使っていた土器や鉄製品など多数の遺物が床の上から出土しました。鉄製品の中には、鏃・挂甲小札など武器や武具があります。

**【掘立柱建物跡】**

全部で 17 棟見つかりました。このうち古代と思われる建物は 11 棟あります。建物①・②は一辺３m程の倉庫と考えられる総柱建物で、南北に並んでいることから同時期のものと思われます。

## ４．発見した遺物

奈良時代後半から平安時代初め頃の土師器、須恵器がたくさん出土しました。その他に円面硯、鉄製品（鏃、挂甲小札、刀子、紡錘車、鋤先（あるいは鍬先）など）、土製品（紡錘車など）、石製品（砥石、垂飾品など）や少量の縄文土器、石器があります。

・土師器は 800℃くらいの温度で焼かれた赤褐色や黄褐色の比較的やわらかい焼き物です。今回出土したものはロクロを使わずに作られた奈良時代のものがほとんどで、ロクロを使って作られた平安時代のものは少量でした。食器の坏、椀、調理・貯蔵用の鉢、甕、甑などがあります。またミニチュアのも出土しました。

・須恵器は窯のなかで 1000℃以上の高温で焼かれた青灰色や灰色の硬い焼き物です。食器の坏、高台坏、蓋、貯蔵用の壷、甕などがあります。

・挂甲とは古墳時代から古代にかけて使われた甲冑の一つで、多数の小札を組み合わせて作られたものです。原田遺跡の住居①から 20 枚前後まとまって出土しましたが、甲のどの部分にあたるかはわかりませんでした。小札の大きさは、長さ 9 ㎝前後、幅 2 ㎝前後、厚さ 2 ㎜ほどで、小札同士をつなげるための径 2 ㎜程の穴があけられています。

様々な食器類（土師器・須恵器）

貯蔵用の須恵器壷

調理･貯蔵用の土師器甕など

貯蔵用の須恵器甕

挂甲模式図

挂甲小札

**住居①から出土した遺物**

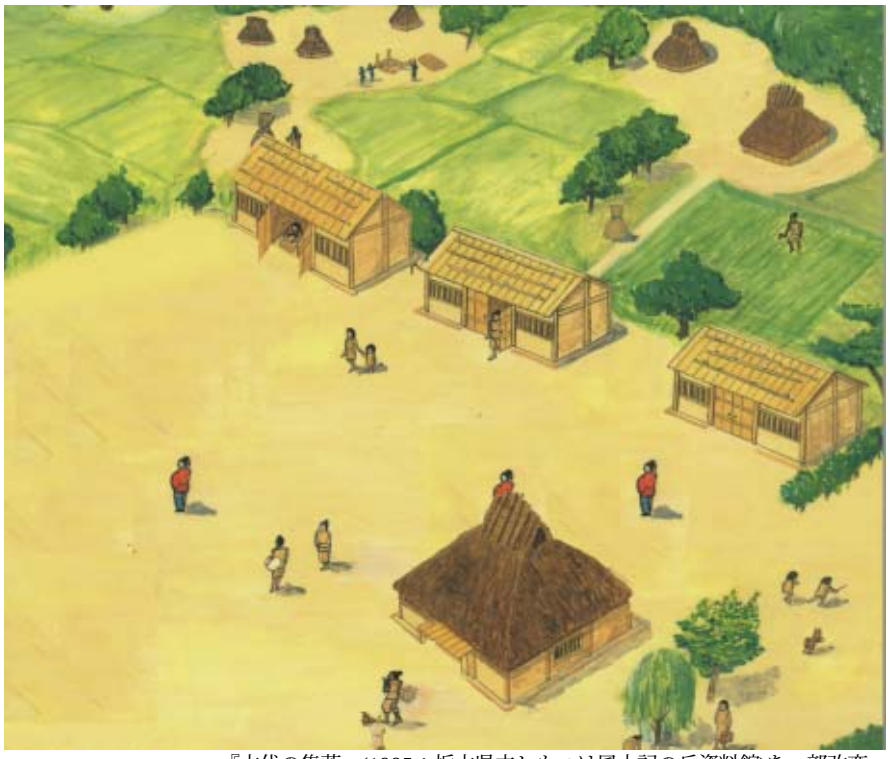
## ５．まとめ

①下萩沢遺跡・原田遺跡で、国史跡伊治城跡が存続していた時期（8 世紀後半～9 世紀初頭）とほぼ同時期の集落を発見しました。

②下萩沢遺跡では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などを発見しました。集落は掘立柱建物と竪穴住居で構成され、また建物・住居の方向を揃えるなど計画的に作られており、伊治城跡がある栗原郡でこれまで見つかっている竪穴住居を中心に構成される集落とは違いがあります。

③原田遺跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを発見しました。集落は竪穴住居を中心とし、小規模な総柱建物などが伴う構成と思われます。竪穴住居から、よろいの一部（挂甲小札）や役所の事務で使われる硯（円面硯）など、一般集落ではあまりみられない遺物が出土しています。

④下萩沢・原田遺跡は伊治城と近接することや、調査成果などから、古代栗原郡の中心である伊治城と関わりをもつ集落と考えられ、当時の様相を解明する上で貴重な資料といえます。



『古代の集落』(1995：栃木県立しもつけ風土記の丘資料館)を一部改変